

## ～ 目 次 ～

はじめに	IV. オリーブ栽培の効果
I. オリーブについて	V. オリーブ栽培の課題
II. 九州・長崎県におけるオリーブ栽培	おわりに
III. オリーブ栽培の条件	

## はじめに

わが国の農業は、従事者の高齢化と後継者不足による就業人口の低下、それに伴う耕作放棄地の拡大など、さまざまな問題を抱えている。また、地方では、大都市部への一極集中により人口減が著しく、地域経済の衰退が危惧されている。

このような状況を打破するべく、近年、農業における耕作放棄地の活用や後継者育成対策として、また、地方における新たな産業の育成や交流人口の拡大策として、ヨーロッパの地中海地方が原産の植物「オリーブ」を栽培する動きが九州をはじめ全国各地でみられており、長崎県でも同様である。

そこで、今回から数回に分けてこの「オリーブ」について採り上げていくこととする。初回は、わが国のオリーブ栽培の歴史や九州・長崎県における栽培状況、栽培に必要な条件、オリーブ栽培から見込まれる効果などについて考察する。

## I. オリーブについて

オリーブは、その栽培がみかんなど他の農作物と比べて比較的取り組みやすいとされ、実から搾油されるオイルは食用をはじめ、医薬品や化粧品などさまざまなことに活用することができる。また、搾油後の搾りかすは家畜の餌などに、木を剪定したあとの葉っぱもお茶に加工することができるなど捨てるどころがなく、多様な商品化が可能な作物である。

### (1) オリーブの歴史

オリーブは、地中海沿岸で樹齢3,000~4,000年の大樹もあるなど生命力が強い植物として知られており、その栽培法は地中海東部から徐々に広がり、約3,200年前にギリシャ諸島からギリシャ本土に到達した。その後、約2,500年前にはアフリカ経由でイタリア南部とスペイン南部に栽培法が伝えられたことからヨーロッパ近隣各国へも広がり、地中海沿岸諸国の主要産業の1つとなって現在に至る。

オリーブ産業が最も盛んなのはスペインであり、南部のアンダルシア地方は世界最大のオリーブ栽培地として知られている。このスペインとイタリアだけで、全世界の半分以上のオリーブが生産されている。

### (2) 政府主導で始まった国内のオリーブ栽培

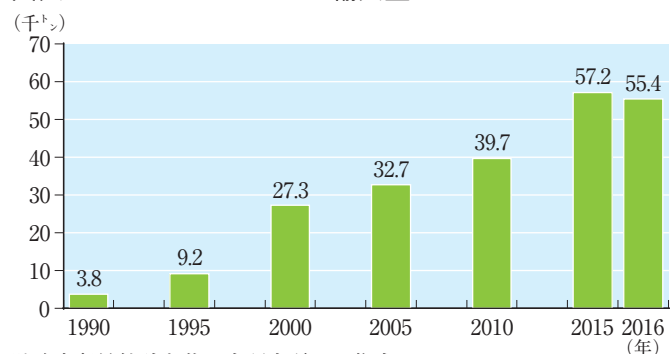
わが国にオリーブが初めて持ち込まれたのは、16世紀の安土桃山時代のことである。さらに、オリーブの木が最初に植えられたのは19世紀に入ってから（1862年）であり、明治時代になると政府が海産物を保存する方法としてオリーブオイルを使ったオイル漬けに着目したことから、国産オリーブオイルの生産のため1908（明治41）年、香川・三重・鹿児島県の3県をオリーブ集約栽培試験場に指定し、栽培に取り組み始めた。その結果、最も根付いたのが温暖で比較的降水量が少ない瀬戸内気候に位置する香川県・小豆島で、同島は現在も「オリーブの島」として有名である。

### (3) オリーブオイルの国内流通状況

日本国内に流通しているオリーブオイルは、主にスペインやイタリアからの輸入物である。オリーブオイルは1990年の初めまでほとんど輸入されていなかったが、イタリア料理、いわゆる「イタメシブーム」や健康志向の高まりから注目されるようになり、「サラダにかける」、「パンに塗る」、「化粧品に使う」など、さまざまな用途が広がってきたことから国内需要が拡大し、それまでの年間数千トンの輸入量が、近年は15倍の5万トン超となっている（図表1）。

わが国の代表的なオリーブ生産地は小豆島を含む香川県と岡山県であるが、なかでも小豆島の生産がそのほとんどを占めている。オリーブオイルの国内生産量は、年間わずか10~20トンに過ぎず、その輸入量に占める割合は多い年でも0.05%程度となっており、国内自給率が極端に低い。オリーブオイル消費の急速な拡大のなか、国産オ

図表1 オリーブオイルの輸入量



財務省貿易統計を基に当研究所にて作成

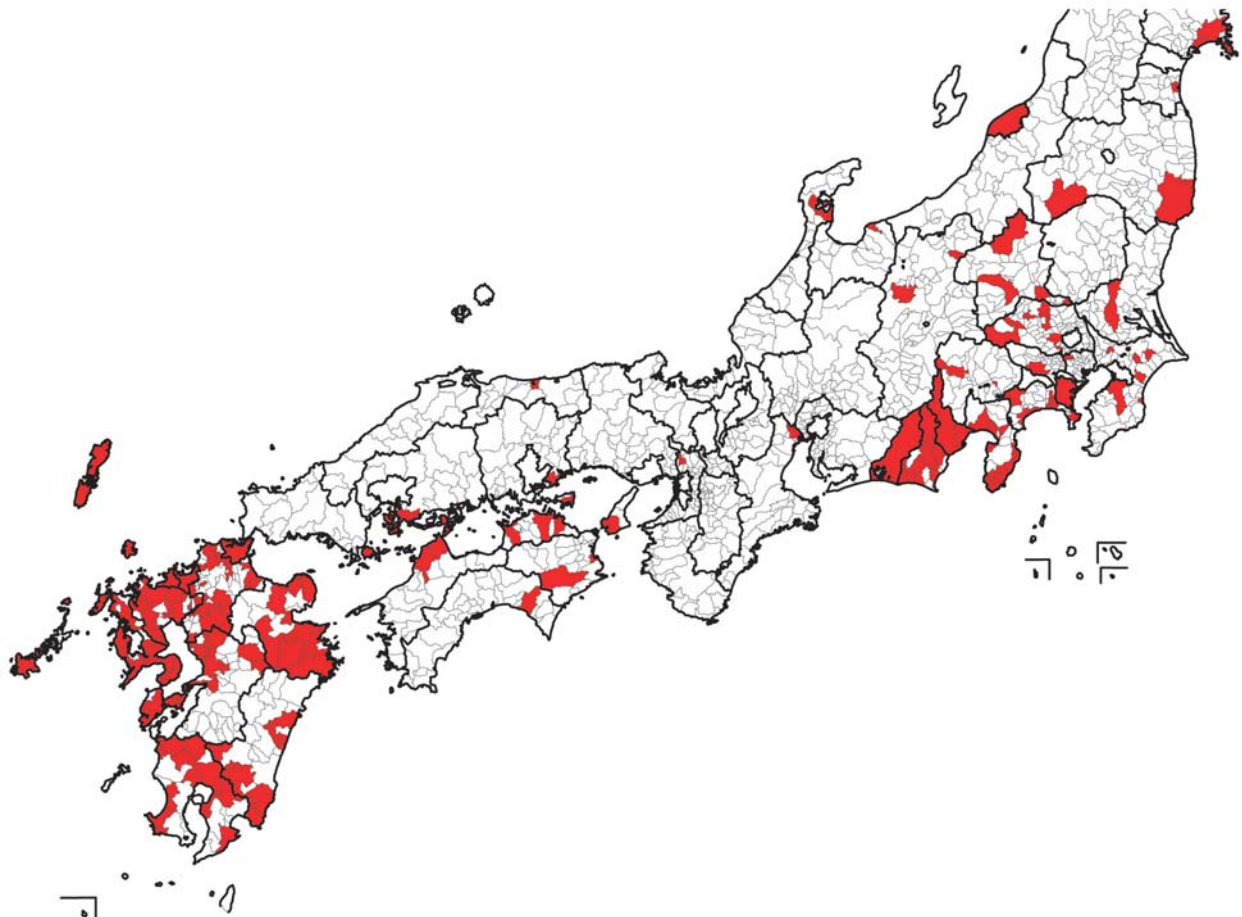
リーブの供給は追いついておらず、国内に流通しているオリーブオイルの99.9%は輸入品であるといえよう。

一方、スペインなど海外の一大産地は大規模栽培による大量生産が可能となっており、苗の種類も多く、安定供給できる体制が整えられている。このような状況のなか、近年、国内でのオリーブ生産に参入する動きが活発化してきており、ここ九州をはじめとする小豆島以外の地域でも栽培に取り組むところが現れはじめた。

## Ⅱ. 九州・長崎県におけるオリーブ栽培

現在、オリーブの栽培は新潟県や宮城県などを北限に全国各地で取り組まれている（図表2）。神奈川県や静岡県といった沿岸地域だけでなく、群馬県や埼玉県など内陸部の農家や企業もその栽培に続々と参入しており、気候が比較的温暖な九州では4、5年前から各地で盛んになってきている（図表3）。

図表2 全国各地のオリーブ栽培地域



※資料：農林水産省関東農政局「オリーブ栽培をめぐる現状」（2016年9月）

## 1. 九州におけるオリーブ栽培事例

九州では、【図表3】の通り、佐賀県唐津市や熊本県荒尾市、大分県の国東半島など、多くの地域にてオリーブ栽培が取り組まれている。ここでは、熊本県天草市と鹿児島県日置市の事例を紹介する。

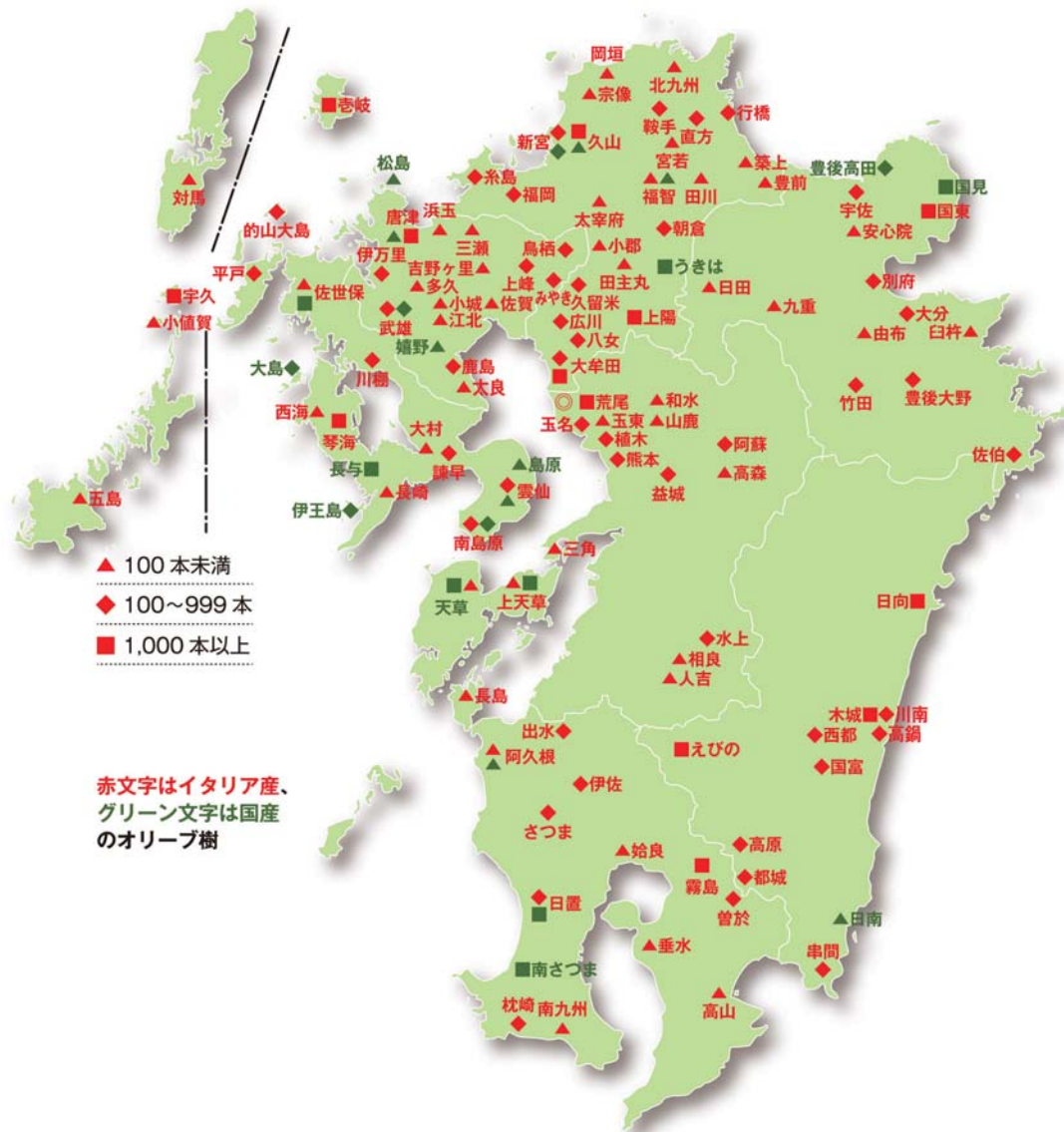
### (1) 熊本県天草市

#### ① 民間企業が経営するオリーブ園

熊本県天草市にある天草オリーブ園は、(株)九電工が2014年に会社創立70周年を迎えるにあたり、九州に育ててもらった会社として地元へ貢献しようと2012年に開園した。

同社が地元・九州に貢献する事業として「農業」、「天草」、「オリーブ」を選んだのは、次の3

図表3 九州におけるオリーブ栽培状況



※資料：(一社)九州オリーブ普及協会「九州オリーブ通信 Vol.8」(2017年6月)

つの理由からである。①九州ではわが国の農業従事者の16%を占めるほど農業が盛んであるが、他所と同様、高齢化と担い手不足、耕作放棄地問題などに悩まされており、地元企業としてこの状況を少しでも改善したいと考えたこと。②天草市内に、農業を営むための広さの土地を確保することができたこと。③栽培する作物の候補120品目のなかから、比較的栽培の手間が軽いことと付加価値を付けやすいことの両方を兼ね備えている作物がオリーブであったこと。



天草オリーブ園のオリーブ

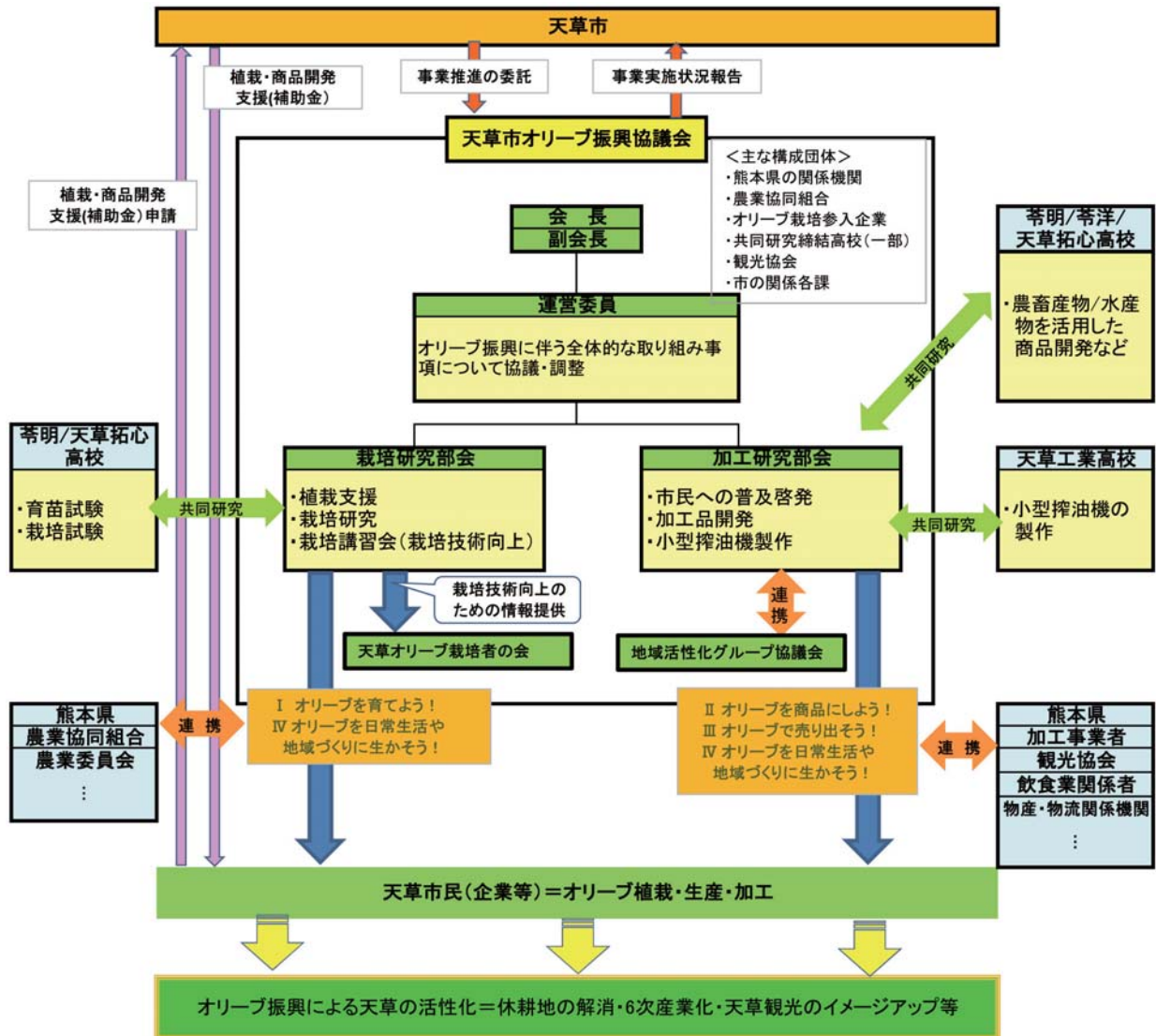
そこで同社は、農業が今のような状況になった原因を「天候に左右されるなど、収入が不安定なうえに人件費の割合が大きく利益確保が難しいことから、農家自身が自分の子どもにすら跡を継ぐことを勧めにくい職業となってしまったからである」と考え、物を供給するだけの1次産業から、1次産業と観光を組み合わせた農業の6次産業化にチャレンジすべく、地域貢献プロジェクト＝天草オリーブ園開園プロジェクトを2009年に開始、翌2010年にオリーブの植栽に着手した。

現在、同社では2.6haの土地に約1,700本のオリーブを植栽しており、これとは別に、同社とオリーブ栽培の共同研究農家として提携している68軒の地元の農家が、約6,800本を植栽している。

## ② オリーブの島づくり

九電工の動きを受けて、地元・天草市はオリーブの植栽について2010年3月、「オリーブの島づくり支援事業補助金」制度を設けて、収穫を目的としたオリーブ植栽に係る経費についての支援を開始、また九電工と共同研究農家として契約した農家についても、苗木預託制度（2年後には無償譲渡）を導入した。次いで同年6月、熊本県の関係機関やJA、農業参入企業等を構成団体とする「天草市オリーブ振興協議会」を設立して、オリーブの栽培普及や栽培技術の調査研究、消費拡大に関する啓発・広報等の各種事業を展開している。さらに2011年2月には、オリーブを活用して1次産業から3次産業までを地域内で完結できる6次産業化を目指すべく、各種産業の振興を図ることを目的とした「オリーブの島づくり推進計画」を策定して、その推進体制を確立するなど、官民が連携してオリーブの島づくりを進めている（図表4）。

図表4 天草市「オリーブの島づくり推進体制」



※資料：天草市「オリーブの島づくり推進計画」（2015年3月、改訂版）

その結果、地元業者（建設業）4社もオリーブ栽培に参入し、2014年度末現在、植栽面積39ha、植栽本数が約18,800本と拡大、またその収穫量も昨年（2016年）同様、今年（2017年）も1トンを超えることが予想されている（図表5）。

図表5 天草市のオリーブ収穫量

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017 (予想値)
収穫量 (トン)	0.5	0.9	2.4	0.6	1.0	1.5

※資料：天草市「オリーブの島づくり推進計画」、市農業振興課より聴取

### ③ オリーブによる農業の6次産業化を推進

今年で7年目を迎える天草オリーブ園のオリーブ栽培は、栽培開始から4年後の2014年に初の収穫が700kgあり、今年（2017年）は1トンの収穫が見込まれている。また、来年（2018年）は2トンを超える

収穫も期待されるなど、10年目となる2020年には収穫5トンを目指している。

このように、園内のオリーブがある程度成長して実も収穫できるようになってきたことから、九電工は6次産業化を推進するために2014年7月、天草オリーブ園を体験型農園にリニューアルした「天草オリーブ園AVILO（アビーロ）」をグランドオープンさせた。

「生産・加工・販売・観光」の一体型“日本初のオリーブ体験農園”を標榜する天草オリーブ園 AVILOでは、2011年に園内に整備していたイタリア製の搾油機を稼働させて、自園で採れた実や、契約農家から持ち込まれる実からオリーブオイルを搾油し、純天草産100%のエクストラバージンオイルを生産している。この天草産オイルは、JR九州の豪華寝台列車「ななつ星」の車内食にも採用されるほど好評を博している。

AVILOでは、このエクストラバージンオイルをはじめ、その他オリーブ関連商品を販売する直売所を開設しているほか、オリーブの実の手搾り体験やオリーブオイルのテイスティング（味見）ができる体験施設の設置、さらに園内散策ツアーの実施など、オリーブの体験型オプションプランを多数用意している。その結果、同園は現在、月に1,200人以上が訪れる天草を代表する観光施設の1つとなっている。

また、（一社）天草宝島観光協会は、天草観光ツアーにオリーブツアーを組み込んでおり、その参加者数は2015年が12コース中1位、16年も13コース中3位の人気となっている。

## （2）鹿児島県日置市

鹿児島県日置市は、誘致した大型企業の撤退に伴う市内への影響を最小限にとどめようと2012年、地元の鹿児島銀行と包括的業務協力協定を締結して地域振興策を探り始めた。そして同年、新たな地域産業として、鹿児島県がかつて明治時代に取り組んでいたオリーブの栽培に着目し、農業6次産業化の推進施策「オリーブ事業構想」として鹿児島銀行とともに取り組み始めた。



天草100%エクストラバージンオイル



AVILO園内にあるオリーブショップ

## 官民協働のオリーブ栽培

2013年、鹿児島銀行は行員2名をオリーブ栽培の本場であるスペインとイタリアに2カ月間派遣して、オリーブ産業とその業界、栽培法など全般について研究・研修させるとともに、オリーブを地域ブランドとして確立するための事業計画書を策定した。

## オリーブ加工販売会社の設立

2014年、日置市内に地元農家10名からなる「オリーブ栽培研究会」が発足し、また、鹿児島銀行を含む地元企業10社がオリーブの加工販売を行う事業会社「鹿児島オリーブ（株）」を設立した。同社は、スペインとイタリアのオリーブ園との間でオリーブオイルの輸入契約を締結した。

## オリーブ用品販売店の設置

2015年、鹿児島オリーブは日置市内にオリーブ専門店「Vigore（ビゴレ）」をオープン。5人の新規雇用が生まれるとともに、スペインとイタリアで収穫して搾油したオリーブオイルの試食販売などを始めた。

## これからの動き

鹿児島オリーブでは、オリーブを使った新商品として化粧品の開発に着手しており、その第1号商品としてオリーブ石鹸の販売を「Vigore」で始めている。また、市内に植栽されている約4,000本のオリーブ（うち、鹿児島オリーブ所有のオリーブは650本）には、4年目の今年から実が付き始めたことから、搾油機の年内導入を目指している（鹿児島銀行 地域開発部・談）。オリーブが日置市の新たな産業となることが期待されている。

## 2. 長崎県におけるオリーブ栽培事例

本県のオリーブ栽培は、平戸市など県北地区から、南島原市など県南地区まで幅広く行われているが、本稿では東彼杵郡川棚町と西彼杵郡長与町における事例を紹介する。

### （1）東彼杵郡川棚町

#### 個人事業主が経営するオリーブ園

東彼杵郡川棚町にある清水オリーブ園は、養蜂業を営む清水美作氏が手掛けている。2014年に植栽したオリーブは、3年物の苗木を植栽したことから、2年目の2016年から実が生り始め、今年は枝が垂れ下がるほど結実した。

現在、5,000坪の土地に350本のオリーブが植えられており、これから3年後を目処に自社オリーブを用いたレストランを開業予定としている。



清水オリーブ園



## (2) 西彼杵郡長与町

### ① みかん農家を中心に栽培

西彼杵郡長与町でのオリーブ栽培は、町の主産品みかんの価格低迷や農業従事者の高齢化、耕作放棄地の拡大という状況を打開するための対策として、2006年に補完作物となる新たな特産品づくりを目指し、オリーブ栽培に興味のある有志10人が集まって「長与町オリーブ栽培研究会」を発足させたことに始まる。その3年後、2009年に町内のオリーブ栽培農家23名から成る「長与町オリーブ振興協議会」が設立され、本格的にオリーブの栽培が始まった。



長与町のオリーブ

このように、長与町におけるオリーブ栽培の取り組みは10年以上となっており、取り組み開始後4、5年目のところが多い九州のオリー

図表6 長与町のオリーブ収穫量

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017 (予想値)
収穫量 (ト)	150(g)	1.2	2.5	0.9	0.2	1.0

※長与町オリーブ振興協議会より聴取。2016年度は日照りと大雪の影響あり

ブ栽培のなかでは、鹿児島県垂水市とともに古い。長与町における今年のオリーブの収穫量は、3年振りに1トを超えることが予想されている（図表6）。

### ② 行政の支援

地元・長与町も、オリーブの視察研修や苗木の購入について助成をするなど、意欲のある農家にはオリーブ栽培への参加を勧めている。また、2016年の搾油機導入についても支援しており、町内で栽培から加工まで完結できるようになった。

### ③ オリーブ振興協議会の課題

2009年に結成された長与町オリーブ振興協議会には当初23名の農家が参加、その後2011年に36名まで増えたが、「栽培の手間はみかんの1/3、収入は3倍になる」としてオリーブ栽培に参入したものの、「虫が付く」、「病気になる」、「実がならない」などの不満から栽培を放棄する参加者が始めて会員数が減少、それに加えて後継者となる若手参加者も増えず組織が高齢化している。2017年9月現在の会員数は21名で、年齢は最高85歳を筆頭に平均70歳近くとなり、栽培方法の継承が課題となっている。

### Ⅲ. オリーブ栽培の条件

オリーブの栽培には、関係者の話や実際に現場でオリーブ栽培に奮闘している人の話を総合すると、いくつかのポイントがあることがわかる。

#### (1) 最も重要な“日当たり”

オリーブの栽培には、日当たりのよい場所、それも日中に加え西日も長く当たるなど、日照時間の長さが重要（年間日照時間2,000時間以上がベスト）である。オリーブの木にできるだけ長時間太陽光が当たる場所を確保できるのかが最大の鍵となろう。

また、気温については年平均気温14℃～16℃が理想とされているが、一時的には-10℃程度の気温にも耐える力があるために、北陸や東北地方でも栽培が取り組まれている。

#### (2) 水分の問題

オリーブ栽培地のそれぞれの年間降雨量をみると、オリーブの本場・イタリアが600mm、わが国のオリーブ王国・小豆島が1,100mmであるのに対し、ここ九州は2,000mm前後と、同じ日本でも小豆島の倍近くの雨が降る。また、実が大きくなる夏が高温多湿のため病気も懸念されることから、オリーブを植栽する土地は水はけのよい土地であることが肝要である。一方、潮風を受けるのは問題なく、直接海水を浴びなければよい。

#### (3) 肥料や植え方などについて

オリーブを植栽するにあたり、日光が万遍なくあたるよう、間隔を空けて植えることや、花粉が受粉しやすいよう、土地の形状や風向きを考えた植栽、木が根付きやすいように、土壤改良に加えて植える際の穴の深さの調整や肥料の種類・量の調整など、手間のかからない作物（みかん栽培の1/3～1/5の労力とも言われている）といえども、農作物を育てることには変わりなく、植栽時のひと工夫によりかなり実の生る確率が高まるようである。

さらに、農業従事者の高齢化に対応するために、そのままと大きな木にすくすくと育っていくオリーブの木をこまめに剪定し、高齢者の手が届く範囲の高さに留め置くことも、実を収穫する際の労力軽減につながるようだ。

## Ⅳ. オリーブ栽培の効果

オリーブの栽培は、耕作放棄地の有効活用など新たな農業対策になるとともに、もうひとつの側面が地域の活性化に寄与することにある。温暖な九州では果実栽培が盛んであるが、果実栽培は重労働でその担い手が不足している。そこで、“比較的”栽培しやすいとされるオリーブは、過疎化を食い止める有効な手段の1つとして注目されている。

また、オリーブは付加価値の高い作物として知られている。オリーブを使った製品は、その年にできた新しい実を塩漬けやオイル付けにした「新漬け」をはじめ、オリーブオイルを使ったお菓子やドレッシング、化粧品など幅広く、高収益が期待される。さらに、オリーブの木は硬質で耐久性があるために、装飾品や調理器具などにも加工できる。

そして、オリーブオイルには、ポリフェノールや植物ステロール、フラボノイドなど数多くの栄養素が含まれており、近年は美容や生活習慣病の予防などその健康効果が注目されている。食卓にオリーブオイルが欠かせない地中海地方では、ガンと心臓病にかかる人が少なく、これはオリーブオイルの定期的な摂取による効能だとも言われている。

オリーブを栽培することによる効果をまとめると、次のとおり。

### (1) 利用価値が高く、市場性のある作物

- ・美容や健康によいオリーブオイルなど、高付加価値商品を生み出し、オイルの残渣（搾りかす）、葉、茎も活用でき、鯨のように捨てるところがほとんどなく、さまざまな商品に加工することができる。
- ・オリーブオイルの国内消費は増えており、今後の需要が見込まれる。
- ・国産のオリーブオイルは非常に少なく、完全な供給不足状態。高価で取引されており、市場の拡大余地が大きい。

### (2) 新たな農業振興の手段

- ・遊休地、耕作放棄地の有効活用。
- ・栽培は“比較的”低労力で済む。高齢化が進む農業従事者、農業未経験者でも“比較的”取り組みやすい農作物。

### (3) 交流人口の拡大に寄与

- ・オリーブそのものが持つ魅力、木のたたずまい、花や実、オイルなどに加え、そこから作られるさまざまな加工品が魅力的なため、人を呼び寄せる。
- ・6次産業化（生産 → 加工 → 販売 → 観光）による雇用創出の手段となる。

#### (4) 子孫への財産として

- ・木の寿命は数百年と長く、財産として後世に遺すことが可能。スペイン、イタリア、ギリシャ、トルコなどのオリーブ先進国における事業では、彼らの祖先が数千年前に植えて大事に育ててきたオリーブの木が財産・資本であり、現在もその木から実を収穫することで成り立っている。川棚町・清水オリーブ園の清水美作氏も「私は子どものためにオリーブ事業に取り組んでいるのではない。孫のためである」と語っている。

## V. オリーブ栽培の課題

### (1) 実が生らない

国内におけるオリーブ栽培の最大の悩みは、“実が生らない”ことに尽きる。もともと地中海に面した温かいところで育つ植物であり、日当たりがよく、比較的雨が少ないことが好条件となるため、日本で実をつけさせるのが難しく、これまで瀬戸内気候の小豆島以外に作物として普及したところはなかった。オリーブ栽培の場所の選定は重要なポイントであり、実が生る可能性の高い苗木を購入することが絶対条件である。実が生らないことには全てが始まらない。



清水オリーブ園のオリーブ

### (2) 収益を得るまでの時間が長い

オリーブの実は、概算で木1本あたり植樹後約6年目に約1kg、翌年から毎年約3kgずつ増加していき、10年目以降に約10kg採取できるようになる。その10kgの実から搾油できるオリーブオイルは約1kgであることから、1本の木から1kgのオリーブオイルが採れると計算できる。

一方、国産オリーブオイル1kgの価格は約2万円である。そこで、植樹して10年目を迎える1本の木からの売上は2万円と捉えることができ、例えば、1,000本のオリーブの木からは、1,000kgのオイルが採れて2,000万円の売り上げが見込めることになる。

このことからわかるように、平均6年目から売り上げは見込めるものの、最大限利益を生み始めるのは植栽後10年目以降となることから、それまでの土地代、苗木代、肥料代、農薬代などの初期投資からすると採算が合わない。木の剪定など農園管理も必要であり、それに人を雇うと人件費が加算されさらに赤字が膨らむこととなる。当初10年間をどう乗り切るのが課題であり、

これに前記の“実が生らない”問題が加わると、スケジュール通りに行かず、資金手当てが難しくなる。

企業や自治体のように初期投資にお金をかけることのできない個人・小規模農家などがオリーブ事業に参入する場合、まず自らの手の届く範囲内でしっかり10年近く栽培した後、次の展開を考えていくことが肝要と思われる。

### (3) 広大な敷地が必要

オリーブの木は、1本を約4～5m間隔で植えていくために、1反(約10a)当たり40本程度しか植えることができない。そのため、オリーブ栽培で本格的に稼ぐには、ある程度の数のオリーブの木を植えることができる広い土地の確保が求められる。

## おわりに

(一社)九州オリーブ普及協会の百富孝行理事長は、「九州を東洋一のオリーブアイランドにしたい」と熱く語っており、また、天草オリーブ園の事業所長で、日本オリーブオイルソムリエ協会の認定ソムリエでもある清田隆二氏も「オリーブ栽培で6次産業化ビジネスモデルの1つの形を示したい。九州を元気にしてお金を回すことで、他産業の成長を促したい」と意気込む。

一方、国内では小豆島以外にその栽培方法を確立しているところはなく、地域に合った栽培法を確立することがオリーブ栽培を成功させる鍵となろう。また、米などと同様、品種改良に地元自治体などとともに取り組むことも考えられる。

植栽後、3年目にして実がたわわに実っている川棚町の清水オリーブ園経営者・清水美作氏は「他の農作物を育てる時と同じように、オリーブという農作物と常に向き合い、その性格を把握するなど作物との“対話”を欠かしてはならない。単に《耕作放棄地対策》などと、植えてそのまま放っておいて実が生るなどと考えるのは大間違いである」と語っており、創意工夫次第では長崎県内でも十分オリーブを栽培できることを示している。近い将来、安心安全な長崎県産、九州産のオリーブオイルが国内市場に出回ることを期待したい。

なお、次回以降については、国内で唯一“オリーブの島”というイメージづくりに成功し、そのオリーブの魅力で観光客が訪れる小豆島におけるオリーブの利活用法とその戦略などについて、また、県内の離島で取り組まれているオリーブ栽培の現状などについて紹介していきたい。

(杉本 士郎)